

いま新富町のこの人が気になる

SHINTOMI-JIN

#007 今月の新富人

1978年、新富町生まれ。新田中学校（当時）在学中に、授業の一環で新田神楽を経験。10年前に県外から帰郷したのを機に、新田神楽の伶人となる。新富郵便局局員。新田神楽でお酒をたくさん飲まされたのをきっかけに、趣味がお酒を嗜むことになったそう。

新田神楽の山場といえば、大蛇に見
強い思いや期待が伝わってきて嬉しいです」と寺原さんは語ります。



9月14日付で、新田神楽が県指定の無形民俗文化財に指定されました。指定を受けた理由の一つとして、学校で神楽の授業を行う、子どもを伶人（れいじん、神楽を舞う人）として受け入れるなど、後継者の育成に取り組んだことでした。

伶人になつて10年目、中堅を担う寺原厚（てらはらあつし）さんも、子どもの頃、新田神楽に触れたことをきっかけに伶人になつた1人。中学生の時、文化祭や地区の祭りで舞つたことがあります。その後は関わることなく、10年前、県外から新富町へ帰ってきたのをきっかけに伶人になります。

「半ば無理やりですが誘われて（笑）。でも、参加することに抵抗がなかつたのは、中学生の頃の経験があつたからだと思います」

新田神楽を舞うのは2月

17日の例大祭、7月の夏

祭り（御神幸祭）をはじめ

め、新田の各地区的祭りに

も呼ばれます。そのたびに練習を

するので、一年を通して新田神楽

に向き合う日々。仕事との両立が

大変ですが、「伶人だから気軽に

声をかけてもらえるし、声援や

拍手ももらえる。地区の人たちの

強い思いや期待が伝わってきて嬉しいです」と寺原さんは語ります。



お面の鼻の穴から覗くことで、足元を見てもお面は常に前を向いているように見えます。

立てた大縄を真剣で断ち切る
「綱切（蛇切、じやきり）」。

これは見る人だけでなく、伶人にとって特別なもの

で、寺原さんいわく「伶人みんなが舞えるわけではない」のだといいます。

というのも、お面で視界

が狭まり、見物客との距離

も近い中、真剣を握つて直径30cmの大縄を切るには、心技体がそろつていないとできない至難の業。先輩の伶人たちと宮司の許可が下りないと、蛇切を舞うことはできません。

「蛇切は40分間、重い真剣を手に舞い続けなければならぬので、1か月前から走りこみをします。刀を抜いた瞬間からドキドキが止まりません。あの緊張感と興奮は、一度味わつたら忘れられませんね」

今回、県指定を受けたことで県外にアピールできるチャンスが増えると喜ぶ寺原さん。

多くの人に興味を持つてもらい、伶人も、新

田神楽と一緒に作り上げてくれる「地域の後

継者」も増えたら嬉しい、と語ります。

「県外の人から『新田神楽は生きている神楽だ』とよく言われます。地域の人と一緒に準備して、地域にある素材で生み出し、地域のために舞う。観光向けでも華やかでもない、だからこそ素朴で落ち着く、この土地にあった神楽が続いているんだと思います」